

令和元年9月9日現在

機関番号：34429

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02746

研究課題名（和文）日本語の用言データベース更新とそれに基づく計量分析および合成形用言の語構成史

研究課題名（英文）Updating of a database of Japanese declinable word, quantitative analysis and a study about history of word composition based on this database.

研究代表者

村田 菜穂子（MURATA, NAHOKO）

大阪国際大学・私立大学の部局等・教授

研究者番号：60280062

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：まず、近世資料について形容詞データの抽出を行い、一つ一つの語について語構造分析を行い、語彙表を作成するとともに作品別・語構成別などの各種の計量的分析を行った。次に、語構成史の観点から、形容詞の中古から中世への変遷について考察を行うとともに、『日本語歴史コーパス』を用いて中古及び中世における日記文学の比較を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で提供しようとしているデータベースは、「語構成史」を構築するための基本データとして、単位語の階層的構造を分析した「結合タイプ」と造語成分の結合パターンを分析した「造語形式」という、これまでは提供されてこなかった質的情報を扱ったものである点に学術的意義があり、このようなデータベースが提供されることによって、音韻史や文法史に比べて立ち遅れている語彙史研究に対して、多大なデータを提供しその進展を大きく促すことが期待できる点で社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：First, we analyzed the adjective in materials in Modern Ages from the point of view of the theory of the composition of the word. Next, we considered about a change to the Middle Ages from Ancient Ages of an adjective from the angle of the word composition history. And we compared diaries as a branch of literature in Ancient Ages and Middle Ages using "Japanese history corpus".

研究分野：人文学

キーワード：語彙 用言 計量分析

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する先駆的研究としては、奈良時代から鎌倉時代に亘る作品毎の見出し語使用頻度を一覧表化した『古典対照語彙表』(宮島氏、1971年)がある。その後「平安文学における形容詞対照語彙表」(安部氏ら、1991年)、『平安時代複合動詞索引』(東辻氏、2003年)、『日本古典対照分類語彙表』(宮島氏ら、2014年)が刊行されているが、これらはいずれも一其時代に限定されている。我々は、これまでの研究で、古代から中世に亘る通時的な視点を備え、かつ、語構成様式の分析も含めた形容詞・形容動詞の語彙表を作成してきた。本研究は、これらをさらに発展させようとするものであり、形容詞・形容動詞と合わせて用言全体としての動向を探ろうとするものである。

(2) 本研究が対象とする古典語作品については、テキストの電子化が進み、テキストデータを形態素レベルまで解析する環境やツールが開発され、一般に公開されるようになってきた。また、中古の和文系資料を対象とした形態素解析辞書も整備され、これらのツールや辞書を使用することで、データを分析する環境が整いつつあると言える。さらに、国立国語研究所開発の『日本語歴史コーパス』では、対象の時代や作品が大幅に拡大され、通時的な分析が可能になりつつある。

(3) また、本研究によって作成した語彙表が公開され、広く利用が可能になることによって、従来にはなかった日本語動詞・形容詞・形容動詞という「用言」の見出し語形と用例数及び語構成様式を通時的に概観できる資料が完成することになり、語彙研究及び語彙史研究分野において特に多くの利用が想定されるだけでなく、時代毎の状況を加味した古典教育や古語辞典編集などにも利用されるものと考えられる。

(4) さらに、データベース検索システムを付与した形式で公開することによって、今日盛んになりつつある計量的分析をさまざまな角度から可能にし、計量国語学の進展にも寄与することになる。

2. 研究の目的

まず、上代から近世に亘る通時的な視点に立ち、古典語の用言、すなわち、形容詞・形容動詞・動詞語彙について、語構造論及び造語論の両観点から分析を行って、一つ一つの語の語構成を記述するとともに分類を行い、その一方で、語彙表を作成するとともに語構成分析結果を反映させたデータベースシステムを構築し、それを公開することによって、日本語学研究、特に、語彙研究及び語彙史研究分野に有益な資料を提供することを目的とする。

さらに、上記の資料を基にコンピュータによる量的データの分析的研究・実証的研究を行い、最終的に、「合成形用言の語構成史」を構築し、従来の研究方法では得られなかった知見を導き出すことを目的とする。

3. 研究の方法

まず、近世の資料から形容詞・形容動詞の採取を行い、これらのデータベース作りを進めるとともに、コンピュータによる量的データならびに質的データの分析を行う。

次に、作品別のデータ・語構成別のデータ・使用頻度順データなどの各種分析データを必要に応じて取り出せるシステムの構築作業を進める。

最終的には、これまでの用言についての研究成果を踏まえて、近世における形容詞語彙の語構成様式や語構成要素についての歴史的変遷について考察し、その集大成としての「語構成史(語構成様式の歴史的変遷)」の構築に取り組む。

具体的な計画・方法は次のとおりである。

(1) 近世の資料から形容詞・形容動詞を採取し、近世語(形容詞・形容動詞)のデータベース作りを進める。

(2)(1)で採取した形容詞・形容動詞の語構成分析を行い、形容詞・形容動詞の一つ一つについて、語構成分析情報(語構造論的分析情報・造語論的分析情報)を配し、それぞれに分類コード付けを行う。これらの語構成分析情報と使用頻度の情報等、すべての情報を入力し、データベースを更新する。

(3)(2)のデータベースを元にして、下記のような量的データに関する資料を作成するとともに、計量的分析を行う。

共時的分析資料

- (A) 使用頻度順対照語彙表(共通作品数付) / 語末から引く逆引き索引
- (B) 異なり語数、延べ語数、用語使用率などの資料
- (C) 単語のレンジ(使用領域の広さ・狭さ)と使用度数の関係性、単語のウエイト(単語の使用度数とレンジとの関係)などの分析資料

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

(D) クラスタ分析 (作品間の距離の分析)

文体 (ジャンル) 別分析資料

(E) ジャンル別の対照語彙表 / ジャンル毎の特有語一覧表

通時的分析資料

(F) 異なる時代の動詞語彙の類似度・相違度 (距離) を測る資料

(4)(3)で行った分析結果を用いて質的な側面からの分析を行う。具体的には、上代語から中世語の形容詞・形容動詞の分析結果と近世語の形容詞・形容動詞についての分析結果とを比較・対照し、語構成様式及び語種についての歴史的変遷を考察する。

4. 研究成果

(1) 近世資料について形容詞データの抽出、語構造分析を行い、語彙表を作成するとともに計量的分析を行った。

日本語形容詞語彙の史的研究所のための基礎資料として、これまで公表してきた形容詞対照語彙表の延長線上に位置づけるべく、近世の形容詞を概観するために、俳諧、仮名草子、洒落本に使用された形容詞を採り、語構成情報を分析して、それらを対照した語彙表を作成した。(「芭蕉・蕪村の俳諧の形容詞の語構成」、「仮名草子の形容詞」、「江戸時代後期の洒落本の形容詞」)

(2) 関連する形容詞・形容動詞についての研究を補完するため、形容詞の中古から中世への変遷について考察を行うとともに、『日本語歴史コーパス』を用いて中古及び中世における日記文学の比較を行った。

時代区分を上代・中古・中世前期・中世後期に分けて、中古以降において新たに出現した形容詞に着目し、新出語がどのように生成されていったか、造語形式・階層構造といった語構成要素の観点から通時的な変遷の過程を考察することを試み、新出語の増産は中古において隆盛を極め、特に第二次・第三次形容詞を中心に発展したが、その一方で、一回しか使用されないものも多く産出され、この傾向は中世になっても継承されていることが明らかになった。(「語構成から見た形容詞 中古から中世への変遷」)

これまでの索引をベースとした語彙の抽出作業では、索引間にある単位認定基準の違いという問題があったが、近年開発された『日本語歴史コーパス』では、この単位認定の問題が克服され、多様な観点からの分析が可能となった。そこで、新たに整備された『日本語歴史コーパス』を使用して、中古及び中世における日記文学の相違点について、語種、品詞、本文種別の三つの観点から比較しようと試みた。その中で、特に形容詞についての分析では、頻度の高い語彙の範囲については、中古と中世で差がないことが確かめられたと同時に、中世で使用されなくなった語及び中世で新たに使用されるようになった語がどのようなものであるかについて明らかになった。(『日本語歴史コーパス』による中古および中世における日記文学の比較)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

村田 菜穂子、前川 武、語構成から見た形容詞 中古から中世への変遷、国語語彙史の研究、査読有、38巻、2019、139-162

村田 菜穂子、前川 武、仮名草子の形容詞、国際研究論叢、査読無、32巻3号、2019、119-133

村田 菜穂子、前川 武、江戸時代後期の洒落本の形容詞、国際研究論叢、査読無、32巻1号、2018、225-240

村田 菜穂子、前川 武、『日本語歴史コーパス』による中古および中世における日記文学の比較、国語語彙史の研究、査読有、37巻、2018、203-230

村田 菜穂子、前川 武、擬古物語の形容動詞、国際研究論叢、査読無、31巻2号、2018、275-279

村田 菜穂子、前川 武、芭蕉・蕪村の俳諧の形容詞の語構成、国際研究論叢、査読無、30巻2号、2017、106-116

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：前川 武

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

ローマ字氏名：MAEKAWA, Takeshi

所属研究機関名：大阪国際大学短期大学部

部局名：ライフデザイン総合学科

職名：教授

研究者番号(8桁): 30238844

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。